



Title	『イーリアス』11歌におけるディオメデース像 : 物語の転機として
Author(s)	大見山, 貴宏
Citation	神話学研究. 2024, 3, p. 13-33
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/100565">https://doi.org/10.18910/100565</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『イーリアス』11 歌におけるディオメーデース像  
——物語の転機として——

大見山貴宏

はじめに

『イーリアス』におけるディオメーデースは、作品前半において中心的な役割を果たす英雄である。彼はアキレウスとは対照的にアガメムノーンの權威を承認し、戦場や集会において抜群の活躍を見せている。しかし、そのような彼も 11 歌においてパリスの矢を受け、作中の戦闘から退場させられることになる。11 歌はこの点においても重要な意味を持っていると言える。

11 歌においては、アガメムノーンが負傷し撤退した後、ヘクトールの参戦によってアカイア勢が窮地に陥ったため、オデュッセウスがディオメーデースに呼びかけ、共闘を求める (11.310-315)。ディオメーデースはこれに応じ、自軍が敗走する中、両者が反攻に転ずる (316-327)。両者が次々と敵を倒してゆくと、ゼウスが両軍の均衡を保つ (328-337)。ヘクトールが両者に向かって突進すると、ディオメーデースは彼に立ち向かう気概を示し、その兜に槍を命中させたものの、これを打ち取るには至らなかった (343-360)。かくして打ち損じたヘクトールを罵った (362-367) 後、ある敵の武具を剥いでいるとき、パリスの矢を受けることになる。

ヘクトールを打ち損じ、彼を罵った後にディオメーデースが負傷する様子は以下のように叙述される。

ἤ, καὶ Παιονίδην δουρικλυτὸν ἐξενάριζεν·  
αὐτὰρ Ἀλέξανδρος, Ἑλένης πόσις ἡϊκόμοιο,  
Τυδείδῃ ἐπὶ τόξῳ τιταίνετο ποιμένι λαῶν,  
στήλῃ κεκλιμένος ἀνδροκμήτῳ ἐπὶ τύμβῳ  
Ἴλου Δαρδανίδαο παλαιοῦ δημογέροντος.  
ἦτοι ὁ μὲν θώρηκα Ἀγαστρόφου ἰφθίμοιο  
αἶνυτ' ἀπὸ στήθεσφι παναίολον ἀσπίδα τ' ὤμων  
καὶ κόρυθα βριαρὴν· ὁ δὲ τόξου πῆχυν ἀνείλκεν  
καὶ βάλεν, οὐδ' ἄρα μιν ἄλιον βέλος ἔκφυγε χειρός,  
ταρσὸν δεξιτεροῖο ποδός· διὰ δ' ἀμπερές ἰός

ἐν γαίῃ κατέπηκτο· ὁ δὲ μάλα ἡδὺν γελάσας  
 ἐκ λόχου ἀμπήδησε καὶ εὐχόμενος ἔπος ἤῤ῍δα·  
 “βέβλεια, οὐδ’ ἄλιον βέλος ἔκφυγεν· ὥς ὄφελόν τοι  
 νείατον ἐς κενεῶνα βαλὼν ἐκ θυμὸν ἐλέσθαι.  
 οὕτω κεν καὶ Τρῶες ἀνέπνευσαν κακότητος,  
 οἳ τέ σε πεφρίκασι λέονθ’ ὥς μηκάδες αἶγες.”  
 τὸν δ’ οὐ ταρβήσας προσέφη κρατερὸς Διομήδης·  
 “τοξότα λωβητῆρ, κέραι ἀγλαὲ παρθενοπίπα,  
 εἰ μὲν δὴ ἀντίβιον σὺν τεύχεσι πειρηθείης,  
 οὐκ ἂν τοι χραίσμησι βιὸς καὶ ταρφέες ἰοί.  
 νῦν δέ μ’ ἐπιγράψας ταρσὸν ποδὸς εὐχεαι αὐτως.  
 οὐκ ἀλέγω, ὥς εἴ με γυνὴ βάλοι ἢ παῖς ἄφρων·  
 κωφὸν γὰρ βέλος ἀνδρὸς ἀνάλκιδος οὐτιδανοῖο.  
 ἢ τ’ ἄλλως ὑπ’ ἐμεῖο, καὶ εἴ κ’ ὀλίγον περ ἐπαύρηι,  
 ὅξυ βέλος πέλεται, καὶ ἀκήριον αἶψα τίθησιν·  
 τοῦ δὲ γυναικὸς μὲν τ’ ἀμφίδρυφοὶ εἰσι παρειαί,  
 παῖδες δ’ ὀρφανικοί· ὁ δέ θ’ αἵματι γαῖαν ἐρεούθων  
 πύθεται, οἰωνοὶ δὲ πέρι πλέες ἢ ἐγυναῖκες.”  
 ὥς φάτο, τοῦ δ’ Ὀδυσσεὺς δουρικλυτὸς ἐγγύθεν ἐλθὼν  
 ἔσθη πρόσθ’· ὁ δ’ ὀπισθε καθεζόμενος βέλος ὦκύ  
 ἐκ ποδὸς εἴλκ’· ὀδύνη δὲ διὰ χροὸς ἦλθ’ ἀλεγεινή.  
 ἐς δίφρον δ’ ἀνόρουσε, καὶ ἡνιόχῳ ἐπέτελλεν  
 νηυσὶν ἔπι γλαφυρῇσιν ἐλαυνέμεν· ἤχθετο γὰρ κῆρ<sup>1</sup>. 368-400

彼はこう言って、槍に名高きパイオーンの子の武具を剥いでいった。  
 一方、髪美わしきヘレネーの夫アレクサンドロスは、  
 軍民の牧者なるテューデウスの子に向けて弓を引き絞るのであった、  
 その昔、民の長老であった、ダルダノスの子イーロスの、  
 人の手でつくられた塚の上にある柱に寄りかかって。  
 ディオメーデースが剛勇アガストロポスの、煌めく  
 胸当てを胸から、盾を肩から、  
 そして重厚なる兜を奪ってゆく一方、アレクサンドロスは弓を引いてゆき、

<sup>1</sup> 本文には West のタイプナー版 (1998, 2000)、訳は既存のものを参照した拙訳を用いる。

射当てた——矢はその手から無駄には飛ばなかった——  
右足の甲に。そして矢は貫通して  
地に突き刺さった。すると彼は大喜びで笑い声を上げ、  
隠れ場から跳び出して、誇って言葉をかけることには、  
「撃たれたな、矢は無駄には飛ばなかったぞ。おれがお前の  
腹の一番下を撃って、命を奪ってやればよかったのだが。  
そうすれば、トロイア勢も災難から一息つけたであろうに。  
彼らはメーメー鳴く山羊たちが獅子にそうするよう、お前に震えているのだ。」  
彼に対し、剛勇ディオメデースが怯むことなく言うには、  
「口さがない弓使いめ、巻き毛でちゃらちゃらした軟派男め、  
もしお前が武装して真っ向から挑んだならば、  
弓も次々と飛ぶ矢もお前の役には立つまい。  
だが今、お前はおれの足の甲を引っ搔いて、空しく誇っている。  
気になどせぬ、女か分別のない子供がおれを撃った場合の如きに。  
つまらぬ臆病な男の矢など、なまくらだからな。  
まことに、それとは違っておれの手にかかれれば、少しかすめただけでも、  
槍は鋭く、たちまち亡き者としてしまう。  
すると、そやつの妻は、両頬に裂き傷があり、  
子らは父無し子であるもの。そやつは血で大地を赤くして  
朽ちてゆき、周りには女よりも鳥の方が多いものだ。」  
彼がこう言うと、槍に名高きオデュッセウスが彼の近くに来て、  
その前に立った。彼はその後ろで腰を下ろし、速き矢を  
足から引き抜いてゆくと、ひどい痛みが身を貫いた。  
彼は戦車に飛び乗り、御者に命じて、  
洞なす船々へ馬を駆らせた。心に苦しみを感じていたのだ。

ディオメデースの負傷に続く以上の場面については、古注から近現代の研究に至るまで、彼に肯定的な見解が多く存在する。すなわち、Wilamowitz (1916) は、この場面をヘクトールに対する勝利と同様に扱い、彼が大いに高められているとし、ヘクトールやパリスへの嘲りには父譲りの激しい気性を指摘する<sup>2</sup>。また、Schadewaldt (1966) も彼の偉大さを強調し、むしろパリスが味方の恐れを告白せねばならず、ディオメデースの返答は、パリス

---

<sup>2</sup> von Wilamowitz-Moellendorff (1916), p.190, p.196.

への強情な軽蔑でしかないとする<sup>3</sup>。Andersen (1978) もそれを踏まえ、パリスは一騎打ちの勝者でなく、ディオメデースは最後に腰抜けとの対決で戦場を後にすることを許されたとしている<sup>4</sup>。一方で、Fenik (1986) は明確に否定的である。すなわち、ディオメデースの暴言は空威張りであり、的外れとなって失敗に終わっていると述べ、ここでの彼はあらゆる点で敗者であって、彼の壮大な出発が惨憺たる終局に墮しているとする<sup>5</sup>。

この場面のディオメデースについて、本稿も否定的評価に傾く。しかしその上で、以前の諸場面との関連、以降の物語展開との関連を深く考察することで、この場面が物語における一つの重要な転換点として機能しており、作品全体の中に効果的に位置付けられていることを明らかにする。その結果、先行研究における検討が十分でなかったディオメデースの役割を提示することができると考えられる。

## 第1章 戦士としての終焉

### 第1節 ディオメデースとアキレウス

ディオメデースの負傷場面には、作品外の伝承にあるアキレウスの死との類似、関連が広く認められている<sup>6</sup>。彼がパリスとアポッローンの矢によって死を迎える運命にあることは作中でも語られ (22.359-360)、『イーリアス』成立以前から存在した伝承とされている<sup>7</sup>。更に岡 (1988) は、ディオメデースがアキレウスの代役である点などに着目し、前者の負傷と後者の死がパラレルであるとする<sup>8</sup>。

これまでのディオメデースは、アイネイアースとの対決をはじめ、後のアキレウスと対応する役割を担って戦い、「優れた名誉」を獲得した (κλέος ἐσθλόν 5.3, 273)。また、アキレウスが出陣を拒む中でディオメデースが武名を挙げることで、両者の効果的な対比が認められた<sup>9</sup>。

両者はヘクトールとの対決においても対応している<sup>10</sup>。11 歌においては、ディオメデ

---

<sup>3</sup> Schadewaldt (1966), p.61.

<sup>4</sup> Andersen (1978), p.138.

<sup>5</sup> 背景としては、成功への欲求の強さといった性格的な短所を述べている。Fenik (1986), p.16.

<sup>6</sup> 『アイティオピス』において、アキレウスは城市へ突入した際にアポッローンとパリスに討たれたとされる。ただし、この作品との関連を必ずしも重視しない見解もある。Fenik (1968), pp.234-235, Taplin (1992), p.164, Alden (2000), p.151.

<sup>7</sup> Cf. 岡 (1988)、273-275 頁、Burgess (2009), pp.38-39.

<sup>8</sup> 岡 (1988)、274 頁。Cf. Burgess (2009), pp.74-75.

<sup>9</sup> 大見山 (2024)、2-3 頁。

<sup>10</sup> 11 歌と 20 歌の対ヘクトール戦における対応に関しては Fenik (1968), pp.93-94. ただし、

ースが徒歩で前線を駆け回っていたアガストロポスを討ち取る（αὐτὰρ ὁ πεζός / θῦνε διὰ προμάχων, εἴως φίλον ὤλεσε θυμόν 11.341-342）。これに気付いた（νόησε 343）ヘクトールが突進し、ディオメデースは彼の兜に槍を命中させたものの、その兜はアポッローンが授けたものであったため（τὴν οἱ πόρε Φοῖβος Απόλλων 353）、これを貫くには至らなかった。その後、ディオメデースは退いたヘクトールを以下のように罵る。

ἐξ αὖ νῦν ἔφυγες θάνατον, κύον· ἦ τέ τοι ἄγχι  
ἦλθε κακόν· νῦν αὐτέ σ' ἐρύσατο Φοῖβος Απόλλων,  
ὧι μέλλεις εὖχεσθαι ἰὼν ἐς δοῦπον ἀκόντων.  
ἦ θήν σ' ἐξανύω γε καὶ ὕστερον ἀντιβολήσας,  
εἴ πού τις καὶ ἐμοί γε θεῶν ἐπιτάροθος ἐστίν.  
νῦν αὖ τοὺς ἄλλους ἐπιείσομαι, ὅν κε κιχείω. 362-367

今度もまた死を免れたな、犬めが。確かに災いがお前に迫ったのだが、今度もまたポイボス・アポッローンがお前を救ってやった。お前が槍の響きの中へ行くときは、この方に祈ることになろう。後であっても、会えば必ずお前を討ち果たしてやる、おれにもいずれかの神が味方してくださればな。だが今は、誰であれ手が届く他の奴らに攻めかかろう。

以上は 20 歌の場面と対応している。すなわち、アキレウスが徒歩で前線を駆け回っていたヘクトールの兄弟ポリュドーロスを討ち取る（θῦνε διὰ προμάχων, εἴως φίλον ὤλεσε θυμόν 20.412）。これに気付いた（ἐνόησε 419）ヘクトールが彼に挑戦したものの、ヘクトールはアポッローンに救われたため、アキレウスが殆ど同様の言葉を繰り返している（449-454）<sup>11</sup>。

しかし、アキレウスが 22 歌においてヘクトールを討つことになる一方、ディオメデースは直後にパリスの矢を受け、無念の撤退を強いられる。また、パリスの矢による彼の負傷も、作品以後におけるアキレウスの死と対応するものである。彼はここでアキレウスと強く対応、対比させられる役割を終えることになり、作中における戦線復帰も二度と果

---

ここでは 11 歌におけるディオメデースの罵倒に関して、定型場面の適用が失敗したものとみなされる。

<sup>11</sup> West (2000) は最終行の冒頭を νῦν δ' ἄλλους Τρώων ... とする読みを採用している。

たすことができなくなった<sup>12</sup>。

## 第2節 対パンダロス戦との対比

パリスはディオメーデースに傷を負わせると勝ち誇り、挑発の言葉をかける。この様子（καὶ εὐχόμενος ἔπος ἠῦδα 11.379）は、古注において「大いに恥ずべきさまで」（ἀσχημόνως πάνυ）とされるなど<sup>13</sup>、パリスが貶められている。ディオメーデースもこれに罵倒を返しており、その冒頭（τοξότα λωβητήρ, κέραι ἀγλαὲ παρθενοπίπα 385）はパリスへの通常の反応<sup>14</sup>とされる。しかし、台詞を更に見ていくと、ディオメーデース自身も、以前に示した英雄像と対比的に描かれていることが分かる。

εἰ μὲν δὴ ἀντίβιον σὺν τεύχεσι πειρηθείης,  
οὐκ ἄν τοι χραισμησι βιὸς καὶ ταρφέες ἰοί. 11.386-387

もしお前が武装して真っ向から挑んだならば、  
弓も次々と飛ぶ矢もお前の役には立つまい。

この台詞に関して、古注は、「難を受けたのと同時に、撃ち当ててきた者に勝負を挑むことは、高貴さに相応しい（γενναῖον）ことである」<sup>15</sup>としてディオメーデースを称えている。この語は明らかに、5 歌における彼の台詞「逃げ腰で戦ったり、縮こまったりすることは、私の高貴さに相応しい（γενναῖον）ことではないからだ」（5.253-254）を踏まえている。彼はパンダロスとアイネイアースの進撃に際して、撤退を進言するステネロスに上述の発言をなし、勇ましい気概を示す。そして両雄に立ち向かい、パンダロスを討ち取った。この「栄光」（κῦδος cf. 225, 260）は、「優れた名誉」（κλέος ἐσθλόν 3, 273）として称えられるディオメーデースの武功の中でも重要な位置を占めるものである。更に、この5 歌と 11 歌の二つの場面はパラレルな構成となっている<sup>16</sup>。すなわち、それぞれの場面では、パンダロス／パリスがディオメーデースを撃ち、勝ち誇る相手に彼が否定／罵倒の言葉を返している。なお、言い返す際も「彼に対し、剛勇ディオメーデースが怯むことなく

<sup>12</sup> ディオメーデースはアキレウスのダブレットとしての機能を有し、ここで彼の役割がクライマックスに至り、また終わりを迎えたとも論じられる。Nickel (2002), pp.224-225. なお、ディオメーデースはここで戦闘力を失った代わりに、14 歌では知恵を用いた献策によってアカイア勢に貢献している。Cf. Christensen (2015), pp.34-36.

<sup>13</sup> Erbse (1974), p.194, bT Scholia ad 11.379.

<sup>14</sup> Willcock (1978), p.303.

<sup>15</sup> Erbse (1974), p.198, bT Scholia ad 11.386.

<sup>16</sup> Cf. Fenik (1968), p.96.

言うには」(τὸν δ' οὐ ταρβήσας προσέφη κρατερὸς Διομήδης) と、同じ定型句が用いられている (5.286, 11.384)。また、11 歌の負傷場面に対する古注も、対パンダロス戦の状況 (5.274-296)、つまり槍を撃ち当てて誇るパンダロスに対し、ディオメーデースが言い返し挑戦した場面にこそ相応しいような記述である。11 歌の負傷場面におけるディオメーデースは、5 歌における彼の勇姿を想起させるものであると言える。

しかし、今回の彼は戦えず、言葉でやり返しただけで、相手への報復に成功した 5 歌の場面とは異なっている<sup>17</sup>。したがって、この場面は対パンダロス戦とパラレルなものとして設定されているものの、ディオメーデースの様子まで同様に立派なものとなすのは正しいと言えず、むしろ彼が、5 歌のような「高貴さに相応しい (γενναῖον)」武功をもちや立てられなくなったことが示されている。場面の対応はそのことを際立たせるものである。

更にディオメーデースの発言は続く。

νῦν δέ μ' ἐπιγράψας ταρσὸν ποδὸς εὐχέαι αὐτως.  
οὐκ ἀλέγω, ὥς εἴ με γυνή βάλοι ἢ παῖς ἄφρων·  
κωφὸν γὰρ βέλος ἀνδρὸς ἀνάλκιδος οὐ τιδανοῖο. 11.388-390

だが今、お前はおれの足の甲を引っ搔いて、空しく誇っている。

気になどせぬ、女か分別のない子供がおれを撃った場合の如きに。

つまらぬ臆病な男の矢など、なまくらだからな。

彼は足に刺さった矢について「引っ搔いて」(ἐπιγράψας) と表現している。Fenik (1986) は具体的にはこうした事実関係の誤りを述べ、彼が振るった長広舌は失敗に終わったとする<sup>18</sup>。更に、パリスは全く自慢をしていないとして、これについてのディオメーデースの嘲りも的外れであるとしているが<sup>19</sup>、「お前は ... 誇っている」(εὐχέαι) の語はパリスの態度「誇って」(εὐχόμενος 379) を踏まえているため、これは当たらない。この箇所も対パンダロス戦との対比を見るべきであり、ディオメーデースがパリスの誇り εὐχος を否定することに失敗した点が重要である。すなわち、ディオメーデースとパンダロスの応酬においては、ディオメーデースの盾を槍で貫いたパンダロスが、「お前は腹を貫かれたぞ」

<sup>17</sup> Cf. Fenik (1986), p.182. パリスによる負傷場面は、パンダロスによる負傷場面 (5.95) と対照的であり、後者においてディオメーデースは冷静さを保ち、報復の機会を与えられたと述べられる。

<sup>18</sup> Fenik (1986), p.16.

<sup>19</sup> Ibid.



(βέβληαι κενεῶνα διαμπερές 5.284)、「おれに大きな誇り (μέγ' εὖχος) をくれたものだ」(285) などと勝ち誇るのをディオメデースが否定し、「外したぞ、当ててはおらぬ」(ἤμβροτες οὐδ' ἔτυχες 287) と言い返す。そして、槍を投げて相手を討つことに成功した。しかし、パリスの矢をまともに受けた今回のディオメデースは戦えず、「撃たれたな (βέβλεαι)、矢は無駄には飛ばなかったぞ」(11.380) とパリスが「誇って」(εὐχόμενος) 述べた発言の否定に失敗しつつ、空しい言葉を連ねている。

結果の伴わない長広舌は作中の英雄たちによって否定的に捉えられ、戦士に相応しくないこととされる (13.292-293, 20.244-245, 251-258, etc.)。「戦いの決着は腕にあり、言葉のそれは評議にあるのだから」(ἐν γὰρ χερσὶ τέλος πολέμου, ἐπέων δ' ἐνὶ βουλῇ 16.630) といった効果的な警句も見られ、彼らの倫理観の発露となっている。ここでは、武器による反撃を伴わないディオメデースの罵倒が、パリスの台詞 4 行に対し 11 行にも及んでいる。このような彼の失態が、5 歌における対パンダロス戦との表面的な対応によって明確にされ、戦場における彼の「栄光」(κῦδος) の終焉を示している。これは次節で触れるように、彼の名誉をめぐる葛藤とも関わる問題である。

### 第3節 「討たれる者の妻」をめぐって

更に、ディオメデースは脅し文句を並べている。

ἦ τ' ἄλλως ὑπ' ἐμεῖο, καὶ εἴ κ' ὀλίγον περ ἐπαύρηι,  
ὄξυ βέλος πέλεται, καὶ ἀκήριον αἶψα τίθησιν·  
τοῦ δὲ γυναικὸς μὲν τ' ἀμφίδρυφοὶ εἰσι παρειαί,  
παῖδες δ' ὀρφανικοί· ὁ δὲ θ' αἵματι γαῖαν ἐρεῦθων  
πύθεται, οἰῶνοὶ δὲ πέρι πλέες ἢ ἐ γυναιῖκες. 11.391-395

まことに、それとは違っておれの手にかかれば、少しかすめただけでも、  
槍は鋭く、たちまち亡き者としてしまう。  
すると、そやつの妻は、両頬に裂き傷があり、  
子らは父無し子であるもの。そやつは血で大地を赤くして  
朽ちてゆき、周りには女よりも鳥の方が多いものだ。

彼は自らが放つ槍の鋭さを誇り、それで討たれる者やその妻子について言及している。これについて Hainsworth (1993) は、パリスと「聴衆」を震え上がらせるよう意図したものと

している<sup>20</sup>。しかし、既に述べているように、ディオメデースは武器で反撃することができなかった。作中において、力関係が明らかな場合や、敵の殺害に成功した場合の威嚇が、相手側に恐怖や悲痛といった心理的打撃を与えることはあり（1.33, 13.417, 14.458, 486, 506-507, 24.571, etc.）、「彼がこう言う」と（ὡς ἔφατ', ὡς ἔφαθ', ὡς φάτο）と述べられた後にそれが明示される。しかし、ここでは「彼がこう言う」と（ὡς φάτο）と述べられた後も、パリスらの反応は全く語られず、戦友のオデュッセウスが守りに来ただけである（11.396-397）<sup>21</sup>。加えて、「討たれる者の妻」へのディオメデース自身による言及は、彼が登場する以前の諸場面との関係を考察する上で重要なものとなる。

5, 6 歌において大々的に叙述されるディオメデースの武勇譚は、「優れた名誉」（κλέος ἐσθλόν 5.3）として称えられ、最後は彼がグラウコスと武具の交換を行い、高価な黄金製の武具を獲得して幕を閉じた。その直後には、城市へ戻るヘクトールの周りに来たトロイア人の妻や娘の様子が描かれている。

Ἐκτωρ δ' ὡς Σκαιάς τε πύλας καὶ φηγὸν ἵκανε,  
ἀμφ' ἄρα μιν Τρώων ἄλοχοι θεὸν ἠδὲ θύγατρες  
εἰρόμεναι παῖδας τε κασιγνήτους τε ἔτας τε  
καὶ πόσιας· ὁ δ' ἔπειτα θεοῖς εὐχέσθαι ἀνώγει  
πάσας ἐξεΐης· πολλῇσι δὲ κήδε' ἐφήπτο. 6.237-241

ヘクトールがスカイアイ門とオークの木の辺りに着くと、  
彼の周りにトロイア人の妻たちや娘らが駆け寄って、  
息子、兄弟、親類縁者、そして夫のことを  
尋ねていたが、そうすると彼は、皆に対し順々に、神々に  
祈るよう命じるのであった。多くの女には苦悩の定めが結びついていたが。

ここでは、5, 6 歌におけるディオメデースの武勇譚がもたらした、「トロイア人の妻たちや娘ら」（Τρώων ἄλοχοι ... ἠδὲ θύγατρες 238）の「苦悩」（κήδεα 241）が焦点化されている。これはヘクトールの意を受けたテアーノの祈りによって更に強く印象付けられる。彼女は、女たちが大声をあげアテーネーに向かって手を差し上げると（301）、次のように祈る。

<sup>20</sup> Hainsworth (1993), p.269.

<sup>21</sup> Fenik (1968) はオデュッセウスがディオメデースの矢を引き抜いたとしている（p.20, p.96）が、ὁ δ' ὀπισθε καθεζόμενος ...（11.397）とあるので当人が引き抜いたとするのが正しい。

πότνι' Ἀθηναίη ἐρυσίπτολι, δία θεάων,  
ἄξον δὴ ἔγχος Διομήδεος, ἡδὲ καὶ αὐτόν  
πρηνέα δὸς πεσέειν Σκαιῶν προπάροιθε πυλάων,  
ὄφρα τοι αὐτίκα νῦν δυοκαίδεκα βοῦς ἐνὶ νηῶι  
ῆνις ἡκέστας ἰερεύσομεν, αἶ κ' ἑλεήσης  
ἄστυ τε καὶ Τρώων ἀλόχους καὶ νήπια τέκνα. 305-310

女神方の中でも尊き、城市を守り給うアテーナイエー女神よ、  
どうかディオメーデースの槍を折り給え、奴自身もまた  
スカイアイ門の前でうつ伏せに倒れることを許し給え、  
さすれば、今すぐにでも、神殿にて、鞭も棒も加えていない  
一年仔の牛十二頭をあなたにお捧げします、もし町と  
トロイア人の妻たちと幼き子らを憐れんでくださるなら。

ここでも「トロイア人の妻たち」という要素が現れ、ディオメーデースの武功によって  
苦難を味わう「町とトロイア人の妻たちと幼き子ら」(ἄστυ τε καὶ Τρώων ἀλόχους καὶ  
νήπια τέκνα 310) への言及がなされている (cf. 95, 276)。このような形で、ディオメー  
デースの武勇譚、すなわち彼の「優れた名誉」(κλέος ἐσθλόν) が「トロイア人の妻たち」  
(Τρώων ἄλοχοι) と関連させられている。

この関連は 8 歌において再び現れる。ネストールの救援に来たディオメーデースがヘク  
トルと直接対決しようとするものの、ディオメーデースとネストールが乗る戦車の前に  
ゼウスが雷を落としたため、ネストールが撤退を勧める。二人のやりとりは以下のように  
続く。

τὸν δ' ἡμείβετ' ἔπειτα βοὴν ἀγαθὸς Διομήδης·  
“ναὶ δὴ ταῦτά γε πάντα, γέρον, κατὰ μοῖραν ἔειπες,  
ἀλλὰ τόδ' αἰνὸν ἄχος κραδίην καὶ θυμὸν ἰκάνει·  
Ἔκτωρ γάρ ποτε φήσκει ἐνὶ Τρώεσσ' ἀγορεύων,  
‘Τυδεΐδης ὑπ' ἐμείῳ φοβεόμενος ἵκετο νῆας.’  
ὥς ποτ' ἀπειλήσει· τότε μοι χάνοι εὐρεῖα χθών.”  
τὸν δ' ἡμείβετ' ἔπειτα Γερήνιος ἱππότης Νέστωρ·  
“ὦ μοι, Τυδέος υἱὲ δαΐφρωνος, οἶον ἔειπες.  
εἷ περ γάρ σ' Ἔκτωρ γε κακὸν καὶ ἀνάλκιδα φήσκει,

ἀλλ' οὐ πείσονται Τρῶες καὶ Δαρδανίωνες  
καὶ Τρώων ἄλοχοι μεγαθύμων ἀσπιστάων,  
τάων ἐν κονίησι βάλες θαλεροὺς παρακοίτας.” 8.145-156

すると、彼に雄叫び良きディオメーデースが答えることには、  
「まことに然り、御老体よ、御身の仰せは全て理に適っているが、  
これは激しい悲痛となって心胸に来ている。  
ヘクトールはいつか、トロイア人のうちで公言しよう、  
『テューデウスの子は、私によって敗走させられ、船へたどり着いた』  
いつかそう豪語しよう。そうなれば、大地が私を呑み込んでほしい。」  
すると、彼にグレーニアーの戦車乗りネストールが答えることには、  
「ああ、猛将テューデウスの息子よ、何たることを言うのじゃ。  
ヘクトールなどが、お主を臆病な軟弱者と言っても、  
トロイア勢や、ダルダニエー勢は納得せぬ、  
それと、心猛き盾使いなるトロイア人の妻たちもじゃ、  
その若盛りの夫たちを、お主が砂塵に撃ち倒したところの妻たちは。」

戦士としての汚名を恐れるディオメーデースに対し、ヘクトールが悪評を広めようと、  
敵や「トロイア人の妻たち」(Τρώων ἄλοχοι 155) は納得せぬ、とネストールが説得して  
いる。ここでは「その若盛りの夫たちを、お主が砂塵に撃ち倒したところの妻たちは」  
(156) という説明が加わり、「優れた名誉」(κλέος ἐσθλόν) とされるディオメーデース  
の武勇譚と「トロイア人の妻たち」が再び関連付けられている。汚名への恐れによるディオ  
メーデースの「悲痛」(ἄχος 147) を鎮めるべく、知恵者であるネストールが持ち出した  
存在が、ディオメーデースの勇名(κλέος ἐσθλόν) と一体的な要素であり、これを成  
立させているとも言える「トロイア人の妻たち」(Τρώων ἄλοχοι)、すなわち「討たれる  
者の妻」であった。

11 歌においては、自身を射たパリスが勝ち誇った(εὐχόμενος 11.379) ため<sup>22</sup>、今度は  
ディオメーデース自らが、その武功の証たる「討たれる者の妻」という要素を持ち出した。  
しかし、今回の彼はもはや武器で反撃できず、パリスらも恐怖などの反応を見せなかった  
ため、その言葉は空しい脅し文句に終わった。ここでは、8 歌におけるネストールとの場

---

<sup>22</sup> 12 歌の戦闘で、同じく矢傷を負ったグラウコスも、「アカイア勢の誰かが、彼が撃たれたのを見出し、誇って言葉を放つ(εὐχετόωιτ' ἐπέεσσιν) ことがないよう」(12.390-391) 密かに撤退した。

面が一層良からぬ形で現れていることが分かる。

詩歌をも介して伝えられる名誉が κλέος であり、戦士の κλέος は、女たちや戦士自身の苦難を伴うものである。アキレウスの「優れた名誉」(κλέος ἐσθλόν 18.121) が、パトロクロスを失った自身の「悲痛」(ἄχος 22) や<sup>23</sup>、アンドロマケーなどトロイアの女たちの嘆き (122-125) を含むように、ディオメデースの「優れた名誉」(κλέος ἐσθλόν) も、「討たれる者の妻」の嘆きや、自身の「悲痛」(ἄχος) を含んでいる。そのため、ディオメデースが戦闘力を完全に奪われ、「討たれる者の妻」という要素を空しく提示しつつ作中の戦闘から退場させられたことは、女たちの悲嘆が歌われる戦士の物語 κλέος に一つの終わりがもたらされたことを示している。

#### 第4節 神助の喪失

ディオメデースは武勇譚の結末において、敵将グラウコスと武具の交換を行っている。ここでは、まずディオメデースがグラウコスの素性を尋ね、お主が神であれば、神罰を受けることがないようお主とは戦わない、と述べた後、グラウコスが応答する。

Τυδείδη μεγάθυμε, τίη γενεὴν ἐρεείνεις;  
οἷη περ φύλλων γενεή, τοίη δὲ καὶ ἀνδρῶν.  
φύλλα τὰ μὲν τ' ἄνεμος χαμάδις χέει, ἄλλα δέ θ' ὕλη  
τηλεθώσα φύει, ἕαρος δ' ἐπιγίνεται ὥρη·  
ὥς ἀνδρῶν γενεή ἢ μὲν φύει, ἢ δ' ἀπολήγει. 6.146-149

心猛きテューデウスの子よ、何故私の家系を尋ねるのか。  
ちょうど木の葉の世代の如く、人のそれもそのようなものだ。  
木の葉を、あるものたちは風が地へ落とすが、あるものたちは森が  
繁って生ぜしめるものである。それらは春の季節に現れるのだ。  
かくのごとく、人の世代は、あるものが生じ、あるものが滅んでゆく。

グラウコスはその後、祖父ベッレロポンテースの栄光と没落を語り、「木の葉の如き」人間の有様を具体的に示しつつ、いかなる人間でも神々の気まぐれを免れ得ないという人間観を披露している。すなわち、神々から美貌と武勇を与えられ、様々な戦いを経て広大な所領を有するに至ったベッレロポンテースも、気まぐれな神々に憎まれ、荒野をさまようことになった (155-202)。

<sup>23</sup> κλέος と当事者の悲しみについては Nagy (1979), pp.94-117.

武具交換それ自体においては、ディオメーデースがグラウコスよりも高価な武具を獲得し、彼に対して「勝利」している（234-236）<sup>24</sup>。しかし、ここでグラウコスによって示された人間観は、11 歌のディオメーデースにおいても現実のものとなる<sup>25</sup>。

トロイア戦争以前において、ディオメーデースは、ステネロスらと共に神々の助けでテーバイを攻略したとされ（4.404-410）、神助は彼の作中における本格的な登場以来、その英雄像を特徴付ける重要なテーマとなっている<sup>26</sup>。そして出撃に際しては、女神アテーナーが彼に力と勇気を授け（5.1-3）、戦闘中、彼がパンダロスの矢で負傷した際はその力を回復させ（114-132）、彼が投げた槍を導いてパンダロスを討ち取らせる（290-296）など、彼が戦場の「栄光」（κῦδος）を得る上で不可欠な役割を果たしてきた。しかし 11 歌においては、彼も女神アテーナーの気まぐれを免れることはできなかった。ここで彼が負傷する際には、女神が現れなかったのである。彼に神助が無いという点は、他の戦士との対比によって明確化される。すなわち、彼の前に活躍するアガメムノーンは、出陣の際、アテーナーとヘーレーが雷を鳴らすことで敬意を表された（11.45-46）。また、ディオメーデースがヘクトールの兜に槍を命中させた際も、その兜はアポッローンが授けたものであるとの説明がなされ、槍を防いでいる（352-353）。更に、ディオメーデースの後に活躍するオデュッセウスも、ソーコスの槍を受けた際、アテーナーの介入によって致命傷を負わずに済んでいる（437-438）。一方、ディオメーデースには神が関与しないまま、敵に反撃することすら不可能な傷を負うことになった。このことは、アガメムノーンやオデュッセウスが自らに傷を負わせた敵を討って報復を果たしたことや（248-263, 439-458）、今後の戦闘において、ヘクトールがゼウスの助けを得て本格的な活躍を見せることとは対照的である。このようにして、「木の葉の如く」儚い人間という武具交換のテーマが示されつつ、神助による以前の武功とは対比的な描写がなされている。

## 第 5 節 演説場面の帰結

---

<sup>24</sup> 武具交換の結末については様々な議論があるものの、しばしばディオメーデースの象徴的な勝利とされる。Cf. Graziosi/Haubold (2010), p.39, p.137.

<sup>25</sup> ベッレロポンテース物語との関連を含めたディオメーデースの神助喪失については Alden (2000), pp.112-152, 特に pp.112-113, pp.131-142, pp.149-152. Alden の分析は多岐にわたるものの、ディオメーデースの負傷について、神々を攻撃したことの報いとする議論をはじめ、その指摘全てに対して容易に同意できるわけではない。しかし、11 歌のディオメーデースがベッレロポンテースと同様に神助を失ったことは少なくとも確実視できるため、本稿では、ベッレロポンテース物語によって具体化されている木の葉の比喻との意味的な関わりを重視する。

<sup>26</sup> Cf. Andersen (1978), p.41.

ディオメデースは7歌と9歌冒頭における「集会」(ἀγορή)と、9歌終盤における諸将の会議で演説している。これら三度の演説場面は、「しばらくして、雄叫び良きディオメデースが、彼らの間で言うことには」(ὁψὲ δὲ δὴ μετέειπε βοὴν ἀγαθὸς Διομήδης 7.399, 9.31, 696)、「馬を馴らすディオメデースの言葉に感嘆して」(μῦθον ἀγασσάμενοι Διομήδεος ἵπποδάμιοι 7.404, 9.51, 711)といった同一の詩行によって特徴づけられる定型場面であり、いずれもディオメデースがトロイア攻略への強い意志を示している。

この三度の定型場面の最後にあたる場面において、ディオメデースは、戦線復帰を拒否したアキレウスを非難しただけでなく、初めて具体策の提案を行い、翌日の戦闘へ向けた準備を皆に勧めることで、またも称賛を得ている(704-713)。しかし、ディオメデースは他ならぬ自身が準備を勧めた戦闘において、パリスの矢を受けることになった。

「集会」(ἀγορή)は、「戦場」(μάχη)と並んで「人々に栄光(κῦδος)を与える」(κυδιάνειρα)とされる場所である。ディオメデースはこの「集会」で二度演説して「栄光」を獲得し、更に諸将の会議でも称賛されている。このような彼の姿が、「戦場」に加え、「集会」など評議の場にも出なかったというアキレウス(cf. 1.488-492)と対比されている<sup>27</sup>。しかし、ディオメデースが9歌終盤における演説の翌日に傷を負うと、以上三度見られたような定型場面はもはや見られなくなった。こうした点も、ディオメデースの物語が一つの終わりを迎えたことを示す上で効果を上げている。

## 第2章 パリスの矢による展開

### 第1節 ディオメデースからマカーオンとエウリュピュロスへ

11歌において描かれる、アガメムノン、ディオメデース、オデュッセウス、アイアースの連続的な撤退に関して、Fenik (1986) は、一連の人物や出来事が共通の細部によって結び付けられ、暗に比較されているとし、各場面の相互依存的な繋がりを指摘する<sup>28</sup>。こうした点を踏まえて更に注目に値するのは、パリスの矢がマカーオンとエウリュピュロスをも負傷させたことで、ディオメデースの退場場面がこれらの場面と対比されつつ、今後の物語と関連を持たせられることである。

---

<sup>27</sup> ディオメデースの三度の演説場面における彼とアキレウスの対比については大見山(2024)、2-5頁、11-13頁。「集会」や評議の場という社会的空間で活躍するディオメデースと、そのような場に出ないアキレウスの対比は、9歌において最も鮮明に描かれている。

<sup>28</sup> Fenik (1986), pp.19-21

ディオメデースが退場した後も戦闘の描写は続き、オデュッセウスの奮戦と負傷、メネラーオスとアイアースによる彼の救援、アイアースとヘクトールの奮戦といったように場面が推移してゆく。両雄がそれぞれ奮戦する中、両軍互角の戦いが続くものの、ここで先程ディオメデースを退かせたパリスが再登場を果たすことで、叙述は新たな展開へ向かう。

οὐδ' ἄν πω χάζοντο κελεύθου δίοι Ἀχαιοί,  
εἰ μὴ Ἀλέξανδρος, Ἑλένης πόσις ἠὲ κόμοιο,  
παῦσεν ἀριστεύοντα Μαχάονα ποιμένα λαῶν,  
ἰῶι τριγλώχινι βαλὼν κατὰ δεξιὸν ὤμον.  
τῶι ῥα περὶ δδειςαν μένεα πνεῖοντες Ἀχαιοί,  
μή πῶς μιν πολέμοιο μετακλινθέντος ἔλοιεν, ... 11.504-509

だが、尊きアカイア勢が進路から退くことは決してなかったであろう、  
もしも髪美わしきヘレネーの夫アレクサンドロスが、  
軍民の牧者マカーオーンが第一の働きをなすのを止めなかったならば。  
鉤三つの矢で右肩を射当てて。  
すると、闘志吐くアカイア勢は大いに彼の身を案じた、  
戦況が転じ、者どもが彼を討つことがありはせぬかと。...

ディオメデースの撤退後も何とか維持された両軍の拮抗状態を破った存在は、やはりパリスであった。ここでは過去の非事実を示す条件文が使用され、パリスの再登場による叙述の転調が印象付けられている。マカーオーンもディオメデース同様、パリスの矢によって負傷しているが、ここではディオメデースの退場場面とは異なり、負傷者本人には焦点が当たらず、「アカイア勢」(Ἀχαιοί 504, 508) 全体に視点が移っている。このことで、アカイア勢の苦戦というテーマが一層際立たせられる。これはパトロクロスを参戦させる上で不可欠な要素である。この後、マカーオーンはネストールと共に戦車で撤退した。

更に戦場では、ヘクトールがアイアースのもとへ到来すると、アイアースはゼウスにより撤退に追い込まれ、アカイア勢の劣勢が一層明らかになっていく。そのとき、エウリュピュロスがアイアースの救援に来て敵の一人を討つものの、やはりパリスの矢で負傷する様子が描かれる。



Ευρύπυλος δ' ἐπόρουσε καὶ αἶνυτο τεύχε' ἀπ' ὤμων·  
τὸν δ' ὥς οὖν ἐνόησεν Ἀλέξανδρος θεοειδῆς  
τεύχε' ἀπαινύμενον Ἀπυσάονος, αὐτίκα τόξον  
εἶλκεν ἐπ' Εὐρυπύλῳ, καὶ μιν βάλε μηρὸν οἷστῳ  
δεξιόν· ἐκλάσθη δὲ δόναξ, ἐβάρυνε δὲ μηρόν.  
ἀψ δ' ἐτάρων εἰς ἔθνος ἐχάζετο κῆρ' ἀλεείνων,  
ἧῦσεν δὲ διαπρύσιον Δαναοῖσι γεγωνῶς·  
“ὦ φίλοι, Ἀργείων ἡγήτορες ἡδὲ μέδοντες,  
στῆτ' ἐλελιχθέντες καὶ ἀμύνετε νηλεὲς ἥμαρ  
Αἴανθ', ὃς βελέεσσι βιάζεται, οὐδέ ἔφημι  
φεύξεσθ' ἐκ πολέμοιο δυσηχέος. ἀλλὰ μάλ' ἄντην  
ἴστασθ' ἀμφ' Αἴαντα μέγαν Τελαμώνιον υἱόν.”  
ὡς ἔφατ' Εὐρύπυλος βεβλημένος· οἱ δὲ παρ' αὐτόν  
πλησίοι ἔστησαν, σάκε' ὥμοισι κλίναντες,  
δούρατ' ἀνασχόμενοι· τῶν δ' ἀντίος ἦλυθεν Αἴας·  
στῆ δὲ μεταστρεφθεὶς, ἐπεὶ ἴκετο ἔθνος ἐταίρων. 580-595

エウリュピュロスは躍りかかり、肩から武具を奪うのであった。  
すると、神とも見紛うアレクサンドロスが、彼が  
アピサーオーンから武具を奪ってゆくのに気付くと、ただちに弓を  
エウリュピュロスに向けて引き絞り、その右の腿に  
射当てた。矢柄は折れ、腿を重くした。  
彼は戦友たちの隊の中へ引き返してゆき、死の運命を避けるのであった。  
彼が大声を上げて叫び、ダナオイ勢に呼ばわった。  
「おお友なる、アルゴス勢の指揮官たち、司令官たちよ、  
振り返って踏み留まり、非情の日を防いでくれ、  
アイアースから。飛んでくる武器に押しまかれていて、彼は  
悲痛なる戦いから逃れられぬと思うのだ。さあ真っ向から、  
テラモーンの息子なる大男アイアースの周りで対峙せよ。」  
エウリュピュロスが撃たれながらもこう言う、彼らはその傍らに  
近く立った、肩に大盾をもたせかけ、  
槍を掲げて。彼らの向かいからアイアースが来た。  
そして向き直って立ち止まった、戦友たちの隊にたどり着いてからに。

エウリュピュロスの負傷は、討ち取った敵の武具を剥いでいるときに起こっており、ディオメーデースのそれと同様に描かれている<sup>29</sup>。更にディオメーデースと同様、エウリュピュロスにも台詞がある。しかしここでは、パリスとディオメーデースの間でなされたような応酬が見られず、むしろアイアースの防衛とその生存に注意が向けられる叙述となっている。すなわち、オデュッセウスがディオメーデースを救援したときと同様、アカイア勢がエウリュピュロスの守りにつくが、これはエウリュピュロスが激励した通り、アイアースの防衛にも効果を発揮し、彼は無事に生還を果たした<sup>30</sup>。アイアースは、パトロクロス参戦に至る戦闘と、その遺体をめぐる戦闘において中心的な役割を担い、劣勢が深まる自軍を支えることになるため、エウリュピュロスの台詞は、アキレウス参戦に至る今後の物語展開に繋がるものとなっている。

ディオメーデース、マカーオーン、エウリュピュロスの負傷場面は、いずれもパリスの矢という共通の要素を有し、そのことで却って物語の転調と展開を強く印象付けている。ディオメーデースに対するパリスの矢が、彼の武功という 5 歌以来の大きなテーマを終息させる側面を強く示しているのに対して、マカーオーンとエウリュピュロスに対するパリスの矢は、パトロクロスとアキレウスの参戦に至る今後の展開を準備している。11 歌におけるパリスの矢は、全体的な戦況の深刻化を効果的に示しつつ、物語を繋ぐ役割を果たしている。

## 第2節 パトロクロスとアキレウスへ

マカーオーンらしき者の姿に気付いたアキレウスが、パトロクロスに様子を見に行くよう命じる。このとき、アキレウスに呼ばれた彼の様子が描かれている。

... ὁ δὲ κλισίῃθεν ἀκούσας

ἔκμολεν ἴσος Ἀρηϊ· κακοῦ δ' ἄρα οἱ πέλεν ἀρχή. 11.603-604

... 彼はそれを聞き、

アレースにも等しいさまで陣屋から出でて、それが彼には災難の始まりであった。

いよいよパトロクロスが現れ、その参戦と死が端的に予告されている。そして、ネストールのもとにきたパトロクロスは、アキレウスへの説得が不可能であれば、彼自身が出陣す

---

<sup>29</sup> Cf. Fenik (1968), p.112.

<sup>30</sup> 古澤 (2015) では、このような「応戦パターン」が続いた後、戦場の外でマカーオーン／ネストールとエウリュピュロスの「助力要請」が起こって今後の展開が準備されると論じられる。

るようにと、参戦を求められている（794-797）。彼はその後、傷を負ったエウリュピュロスと出会って彼を憐れみ、治療を施す（809-848）。アカイア勢の苦戦という全体的な状況をパトロクロスに直接繋げる上で、パリスの矢は重要な役割を果たしていると言える<sup>31</sup>。

パリスの矢は、作中のディオメデースに戦士としての終焉をもたらした上、マカーオンとエウリュピュロスをも負傷させたことで、今後の物語展開を示しつつ、パトロクロスの登場を招いている。彼の登場と共にその参戦と死が予告され、これはアキレウスの参戦に直結する。彼も死にゆくヘクトールによってアポッローンとパリスによる死を予告されるが（22.359-360）、パリスの矢によるアキレウスの死は、作中では他ならぬディオメデースの負傷場面にモチーフとして先取りされている。

11 歌におけるディオメデースの負傷と、作品外におけるアキレウスの死は、パリスの矢を通じた物語展開の冒頭と結末に置かれ、更にパラレルな場面として設定されることで、両者の英雄像が対比されている。すなわちディオメデースは、アガ멤ノーンを頂点とするアカイア勢という社会を承認した後（4.412-418）、「優れた名誉を得るために」（ἵν'... κλέος ἐσθλὸν ἄροίτο 5.2-3）出陣し、5, 6 歌の戦闘でそれを獲得した<sup>32</sup>。彼は最後にはヘクトールに勝利したものの、これを討つことには失敗し、直後にパリスの矢を受けることになった。その結果、作中におけるディオメデースの戦線復帰は不可能となった上、彼は以前に示した立派な英雄像からも逸脱した。このような形で、彼の戦場における κλέος は終焉を迎え、戦士の不安定な本質が示されることになった。一方、アキレウスは 1 歌以来、アガ멤ノーンを頂点とする社会を飽くまで拒否し続けた結果、自らの代わりに出陣したパトロクロスを失ってしまう。そのため、ヘクトールを討てば自らも死ぬと母テティスから予言されたものの（18.96）、「ですが、今は優れた名誉を得たく思います」（νῦν δὲ κλέος ἐσθλὸν ἀροίμην 121）と述べて出陣する。これは自らの死を伴うものであるため、アキレウスがその命と引き換えに得ると予言されていた「不滅の名誉」（κλέος ἄφθιτον 9.413）である<sup>33</sup>。彼はヘクトールを討つことに成功したものの、作品以後においてパリスの矢を受けることになる。アキレウスはこのようにして死を迎え、やはり戦士の儚さを示すものの、このことで初めて彼の「優れた名誉」には「不滅」（ἄφθιτον）の性質が保証されることになる。ディオメデースとアキレウスは共に「優れた名誉」を得るべく出陣し、最後にはパリスの矢を受けるという点で対応させられているが、そのことで却って諸々の相違点が明確化されている<sup>34</sup>。

<sup>31</sup> エウリュピュロスの治療によるプロットの遅延が正しく指摘されているが、今はパトロクロス参戦の心理的要因としてこの件を重視する。Cf. 古澤（2015）、21 頁以下。

<sup>32</sup> Cf. 大見山（2024）、2 頁、9-10 頁。

<sup>33</sup> Cf. Taplin（1992）、pp.197-198、大見山（2024）、8-9 頁。

<sup>34</sup> Cf. 大見山（2024）、7-11 頁。ディオメデースとアキレウスは「優れた名誉」（κλέος

ディオメデースはこれまでも、アキレウスとの対比的関係の中で、その特異な英雄像を際立たせる役割を果たしてきた。この負傷場面においても同様の効果が見込まれると同時に、作中においてディオメデースとアキレウスが深く関係するのは、これが最後となった<sup>35</sup>。そして、今後の物語展開を知る聴衆は、ディオメデースの負傷場面からアキレウスの死を想起し、一人の偉大な戦士の終焉を見出したとき、アキレウスを中心とする物語の始動を感ずることになる。

## おわりに

11 歌におけるディオメデースは、以前と同様、アキレウスと対応する役割を担って戦っており、最後はパリスの矢を受けて作中の戦闘から退場させられている。これについて本稿では、前後の諸場面との関連に注目して多角的に考察することで、従来の理解が十分でなかったディオメデースの役割を提示した。検討結果は以下のようにまとめられる。

矢傷を負ったディオメデースは、パリスに武器で反撃できないまま空しい言葉を連ねるに至り、武勇譚などにおいて示した英雄像からの逸脱を見せた。この様子が、これまでに見られた彼の姿と何らかの形で関係を有することで、その戦士としての終焉が効果的に示されている。すなわち、この終焉は 5 歌における彼の「栄光」(κῦδος) である対パンダロス戦との対応、対比によって強調されている。更に、6 歌において彼の「優れた名誉」(κλέος ἐσθλόν) に付随するものとして描かれ、8 歌では「優れた名誉」を彼に確認させるべくネストールが言及した「討たれる者の妻」も、彼自身の口から良からぬ形で現れている。その上、彼は 4 歌以来のテーマである神助を得ることもできず、6 歌の武具交換で示された人間観を証明してしまった。また、評議の場でトロイア攻略への意志を示してきた彼の 9 歌終盤における演説も、自身の負傷に帰結した。以上のような形で、戦闘を通じて名誉を追求する存在の不安定な本質が暴かれ、戦場におけるディオメデースの物語 κλέος に終止符が打たれることになった。

---

ἐσθλόν) を「得る」(ἄρσνυμαι) 戦士として対応させられている。しかし、それぞれの背景は、アカイア勢という社会の内／外に置かれた両者の在り方と深く関係し、対比的に描かれている。そして両者の「名誉」の性質も異なっており、アキレウスの「優れた名誉」については「不滅の名誉」とされることで、物語として作中社会を超越する側面が強調されている。ディオメデースとアキレウスの関連について、本稿では更に、対ヘクトール戦をめぐる両者の対応と対比、パリスの矢をめぐる両者の対応と対比、という新たな視点を加えて論じている。

<sup>35</sup> デイオメデースの残りの場面に関して、彼は遅延 retardation にあたる 14 歌で演説を行うが、彼の役割は負傷以前のそれとは異なっている。他は 23 歌における葬送競技に登場する。

ディオメデースの負傷は、彼の武功という 5 歌以来の大きなテーマの終焉である一方、パリスの矢という要素を通じて、作品以後におけるアキレウスの死に至る今後の物語展開とも関連している。マカーオンとエウリュピュロスに対するパリスの矢は、負傷者本人よりも、むしろ今後に関わるアカイア勢全体の状況に聴衆の注意を向けている。このような両者の負傷はパトロクロスの登場をもたらし、その参戦と死が予告され、これが遂にはアキレウスの参戦と死に至る。更に、ディオメデースの負傷とアキレウスの死が、パリスの矢を通じた物語展開の冒頭と結末に設定され、両者の英雄像が対比されている。アカイア勢という社会の中で武功を追求し続け、「優れた名誉」(κλέος ἐσθλόν)を得たディオメデースも、結局ヘクトールを討つには至らず、パリスの矢を受けて戦士としての終焉を示した。一方、アカイア勢という社会を拒否する中でパトロクロスを失ったアキレウスは、「優れた名誉」(κλέος ἐσθλόν)を得るべく再出陣を果たし、ヘクトールを討つことに成功するものの、パリスの矢を受けて死を迎えることで、自らの命と引き換えの「優れた名誉」すなわち「不滅の名誉」(κλέος ἄφθιτον)を初めて成就させることになる。

以上のように、ディオメデースは作中における戦闘から退場する形で、後のアキレウスの姿を対比的に示しつつ、「アキレウスの怒り」という物語の核心へ進む流れに大きく寄与したのであった。

## 参考文献

大見山貴宏『『イーリアス』9 歌におけるディオメデース像——アキレウスとの対照性——』『西洋古典論集』27, 2024 年、1-16 頁。

岡道男『ホメロスにおける伝統の継承と創造』創文社、1988 年。

呉茂一(訳)『ホメーロス イーリアス 上』平凡社ライブラリー、2003 年、岩波文庫版三巻本(初版 1953, 56, 58 年、改版 1964 年)の復刻、再編集版。

同(訳)『ホメーロス イーリアス 下』平凡社ライブラリー、2003 年、同上。

古澤香乃「アカイア勢の負傷と助力要請——『イーリアス』の物語構成における第 11 巻の位置づけ——」『西洋古典学研究』63, 2015 年、13-25 頁。

松平千秋(訳)『ホメロス イリアス (上)』岩波文庫、1992 年。

同(訳)『ホメロス イリアス (下)』岩波文庫、1992 年。

Alden, M., *Homer Beside Himself: Para-Narratives in the Iliad*, Oxford: Oxford University Press, 2000.

Andersen, Ø., *Die Diomedesgestalt in der Ilias*, Symbolae Osloenses Vol. Suppl. XXV, Oslo: Universitetsforlaget, 1978.

- Burgess, J., *The Death and Afterlife of Achilles*, Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 2009.
- Christensen, J., “Diomedes’ Foot Wound and Homeric Reception of Myth,” in: González, J. M. (ed.), *Diachrony: Diachronic Studies of Ancient Greek Literature and Culture*, Berlin: de Gruyter, 2015, pp.17-41.
- Erbse, H. (ed.), *Scholia Graeca in Homeri Iliadem vol. III*, Berlin: de Gruyter, 1974. (古注)
- Fenik, B., *Typical Battle Scenes in the Iliad*, Wiesbaden: Franz Steiner, 1968.
- Id., *Homer and the Nibelungenlied: Comparative Studies in Epic Style*, Cambridge, MA: Harvard University Press, 1986.
- Graziosi, B. & Haubold, J., *Homer: Iliad Book VI*, Cambridge: Cambridge University Press, 2010. (Cambridge Greek and Latin Classics)
- Hainsworth, B., *The Iliad: A Commentary Volume III: books 9-12*, Cambridge: Cambridge University Press, 1993.
- Nagy, G., *The Best of the Achaeans: Concepts of the Hero in Archaic Greek Poetry*, revised ed., Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1999 (1st ed. 1979).
- Nickel, R., “Euphorbus and the Death of Achilles,” *Phoenix*, 56, 2002, pp.215-233.
- Schadewaldt, W., *Iliasstudien*, 3. Aufl., Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1966 (1. Aufl., Leipzig: S. Hirzel, 1938).
- Taplin, O., *Homeric Soundings: The Shaping of the Iliad*, Oxford: Clarendon Press, 1992.
- von Wilamowitz-Moellendorf, U., *Die Ilias und Homer*, 2. Aufl., Berlin: Weidmannsche Buchhandlung, 1920 (1. Aufl., 1916).
- West, M. L. (ed.), *Homerus Ilias, Volumen Prius: Rhapsodiae I-XII*, Stutgardiae: B. G. Teubner, 1998. Editio Stereotypa, Berlin: de Gruyter, 2011 (Bibliotheca Teubneriana).
- Id., *Homerus Ilias, Volumen Alterum: Rhapsodiae XIII-XXIV*, Monachii: K. G. Sauer, 2000 (Bibliotheca Teubneriana).
- Id., *Greek Epic Fragments: From the Seventh to the Fifth Centuries BC*, Cambridge, MA: Harvard University Press, 2003 (Loeb Classical Library).
- Willcock, M. M., *Homer Iliad I-XII*, London: Bristol Classical Press, 1996 (London: Macmillan, 1978).

(京都大学博士後期課程)